

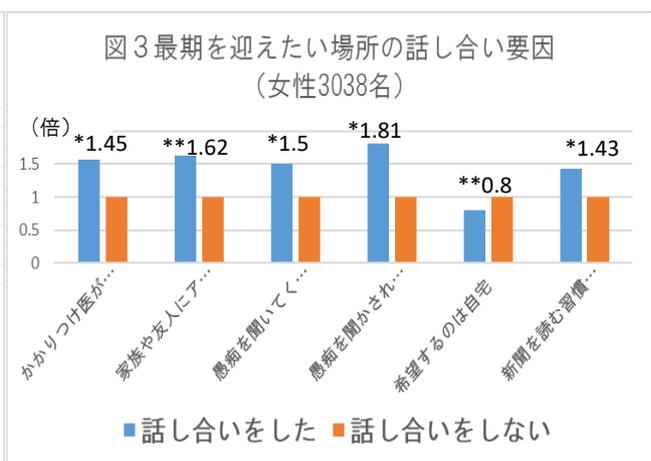
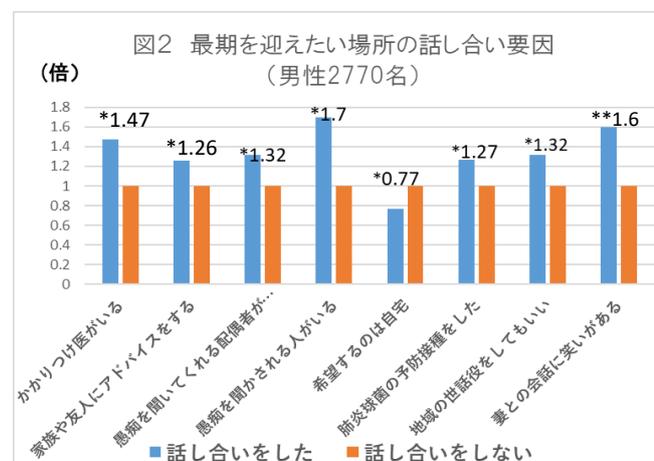
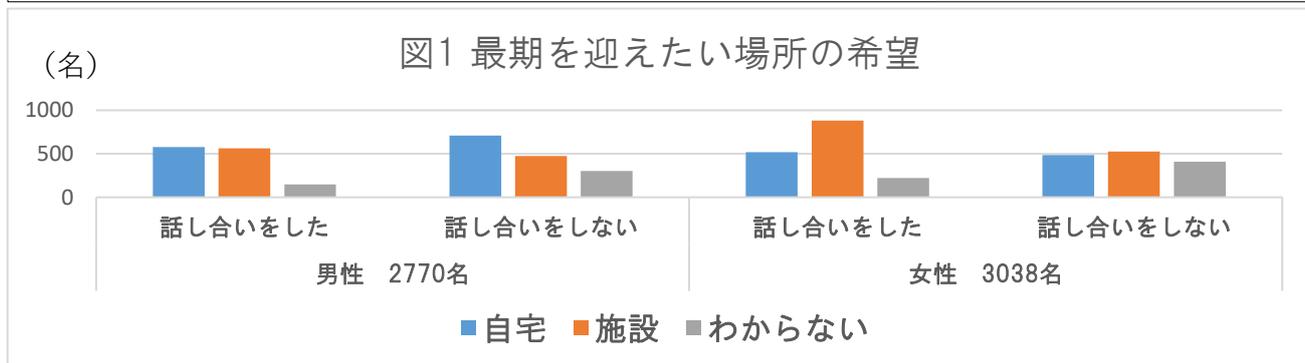
## 後期高齢者が最期を迎えたい場所を話し合う要因は？

▶男性は地域のお世話役をすると1.32倍、妻との会話に笑いがあると1.6倍

▶女性は新聞を読む習慣があると1.43倍 話し合いをしている

日本では、国民の47.4%が自宅で死にたいと回答していますが、実際に自宅で看取りが可能だったのは13.2%でした。事前に最期を迎えたい場所を話し合うことは、厚生労働省が薦める「人生会議」の主旨にもなっています。しかし、高齢者のその話し合いの実態については十分にわかっていません。そのため、終末期により近い後期高齢者の男女(介護認定なし、男性2770人、女性3038人)を対象とした調査を行いました。最期を迎えたい場所の話し合いをする人は男女とも、かかりつけ医がおり、家族や友人とのソーシャルネットワークを持っていて、アドバイスや愚痴のやり取りがありました。男性は家族との関係が良く、疾病予防的行動をとり、地域の役割を担う意欲のある人が話し合いをしていました。女性は新聞を読む習慣を持つ人が話し合いをしている傾向がありました。

お問合せ先:大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程 森木友紀 [y.moriki3@gmail.com](mailto:y.moriki3@gmail.com)  
 東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科在宅ケア看護学分野 教授 福井小紀子 [fukuisakiko.chn@tmd.ac.jp](mailto:fukuisakiko.chn@tmd.ac.jp)



●図2、3では、話し合いをしないを“1”としたとき、話し合いをする場合が何倍かを比較しています。

\* 今回のような結果が、偶然のためにたまたま観察される確率を計算したところ5%未満でした \*P<.05, \*\*P<.0001

## ■背景

日本では、死に関する話は縁起が悪いとされ、タブー視されてきました。事前に本人が最期を迎えたい場所を話し合う機会を持つことは、厚生労働省が推奨する「人生会議」の主旨にもなっています。しかし、高齢者の最期を迎えたい場所についての話し合いの状況については十分にわかっていません。そのため、終末期により近い後期高齢者をターゲットとして、最期を迎えたい場所の話し合いを持つことと関連する要因を男女ごとに調べました。

## ■対象と方法

対象は日本老年学的評価研究の2016年度調査に参加し、最期を迎えたい場所の項目を含む自記式郵送調査に回答した、全国39市町の要介護認定を受けていない後期高齢者5,808名(男性2,770名、女性3,038名)でした。

「あなたは、ご自分が病気などで最期を迎えるとしたらどこで迎えたいですか」「それについて誰かと話し合いをしていますか」の設問に対して、“全くない”と“話し合い(+記録)をした”と回答した人に分けました。「話し合い(+記録)をした」と関連する要因を「ヘルスケア」、「家族」、「コミュニティ」のカテゴリーに分け、男女ごとに検討しました。

## ■結果

最期を迎えたい場所の話し合いをしていたのは、男性46.5%・女性53.3%でした。話し合いをしていた人の中では、自宅を希望する人が男性44.8%・女性31.9%、病院を含めた施設を希望する人が男性43.7%・女性54.4%でした。

最期を迎えたい場所の話し合いをしない人を1とした場合、

- ※かかりつけ医がいる人だと男性1.47倍、女性1.45倍、
- ※家族や友人にアドバイスを求める人だと男性1.26倍、女性1.62倍、
- ※心配事や愚痴を聞いてくれる配偶者がいる人だと男性1.32倍、女性1.50倍、
- ※心配事や愚痴を聞いてあげる人がいると男性1.70倍、女性1.81倍、
- ※最期を迎えたい場所で自宅を希望する人は、男性0.77倍、女性0.80倍

話し合いをする可能性が高いという結果でした。

男性のみで最期を迎えたい場所の話し合いと関連がみられた要因は、

- ※地域の世話役をしてもいい(1.32倍)、●※肺炎球菌の予防接種をした(1.27倍)、
- ※夫婦の会話に笑いあり(1.60倍)でした。

女性のみで関連がみられた要因は、

- ※新聞を読む(1.43倍)でした。(※ 統計学的に有意)

## ■結論

日本では、最期を迎えたい場所の話し合いをする人は男女とも、かかりつけ医がおり、家族や友人のソーシャルネットワークを持っていて、アドバイスや愚痴のやり取りがありました。男性は家族との関係や、疾病予防的行動をとり、地域の役割を考える人が話し合いをしていました。女性は新聞を読む習慣を持つ人でした。

## ■本研究の意義

日本は高齢化のスピードが速く、長寿であるがゆえに後期高齢者の割合が多い国です。本研究の意義は、最期を迎えたい場所の話し合いをする要因を明らかにしたことで、話し合いの促進を図り、本人、家族が満足、納得する死への支援につながる可能性があります。

## ■発表論文

Yuki Moriki, Maho Haseda, Naoki Kondo, Toshiyuki Ojima, Katsunori Kondo, Sakiko Fukui, Factors associated with discussions regarding place of death preferences among older Japanese: A JAGES cross-sectional study, *American Journal of Hospice and Palliative Medicine*, <https://doi.org/10.1177/1049909120954813>

■謝辞

本研究は、JSPS 科研(JP15H01972, JP19K21468)、  
厚生労働科学研究費補助金(H28-長寿-一般 002)、  
国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED) (JP17dk0110017, JP18dk0110027,  
JP18ls0110002, JP18le0110009, JP20dk0110034, JP20dk0110037h0002)、  
国立研究開発法人国立長寿医療研究センター長寿医療研究開発費(29- 42, 30-22, 20-19)、  
国立研究開発法人科学技術振興機構 (OPERA, JPMJOP1831)、  
革新的自殺研究推進プログラム(1-4)、  
公益財団法人笹川スポーツ財団、  
公益財団法人健康・体力 づくり事業財団、  
公益財団法人ちば県民保健予防財団、  
公益財団法人8020 推進財団の令和 元年度 8020 公募研究事業(採択番号:19-2-06)、  
新見公立大学(1915010) 、  
公益財団法人明治安田厚生事業団などの助成を受けて実施いたしました。記して深謝します。